
幻想のアイデア

榎河友聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想のアイデア

【Nコード】

N0063BA

【作者名】

榎河友聖

【あらすじ】

この世に絶望し、自ら命を絶った少年は、気がつけば、別の世界で生き延びていた。

遺書は、第二の人生謳歌したまえ、と改竄されていた。

幻想の世界で、新たな人生を少年は歩めるのか。

01 始まりは森の中に

……この世は、理不尽過ぎる。

一人の少年が、木に吊された縄の輪っかに手を掛ける。

辺りは、暗く、黒い髪は闇に紛れ、お隣の家で飼われている梟の鳴き声が聞こえる。驚くほど、しんとして静まり返った時……なる程、人が死ぬ時というのはこういう時 瞬間をいうのかもしれない。

……未練は、無い。無い……はずだ。両親はいないし、親しい友とも別れた。恋い慕う人もいなければ、自分を想ってくれる人もいない。そうでなければ、自分は……。

「……………」
輪っかにゆっくりと静かに、顎を乗せていく……。

足を乗せた小さな梯子を見て、少年は、目を閉じ、この世に別れを告げる。

さようなら。

ガン、と梯子が地面に倒れる音が梟の鳴き声と混ざり合って、奇怪な音だった。最後の音だった。

*

ふと、目が覚めた。

あれ、と思った。確かに自分は……。

不思議に思っ、辺りを見渡してみると、風景がある。朝の日差しが照る、田舎道 そんなところか。

指先の感覚を確かめ、少年は立ち上がり、服装を確認する。

黒っぽい色のブレザー、同色のズボン、カッターシャツ……間違

いない。自分の学校の服……最後まで着ていた服だ。靴もそのままだった。

死に損ねた？ 夢だったのか、あれは……いや、そんなはずは……。しかし、この風景は、見たことがない。こっちが夢か？ いや、指先の感覚はある。

「あー……」

声も、出る。では、一体何が。

「……そういえば」

少年は、制服のポケットを漁る。

「あつた」

取り出した物は、一枚の紙……いくなれば自分の遺書だ。今思えば、こんなものを書くあたり、未練があつたのかもしれない。それもどうでもいい話だが。

本題は、これで自分は生きてしまっているということだ。こんなに細かい夢など見た例がない。そういえば走馬灯も見ていない。

しかし、改めて、生きていると実感すると何とも奇妙なものだ。ガサと自分の遺書を開く。自分の遺書を読むのも変な話だ。

そう思い、読み出すと、ん？ と思う。

書かれている内容が、自分の記憶にない。

一言一句、全部が違う。

書かれていた内容はこうだ。

『ようこそ、幻想の世界へ。第二の人生、リタイアせず謳歌したまえ』

……………。

ある種の悪夢だ、これは。

だが、夢ではない。書かれている幻想の世界でもない。紛れもない現実だ、これは。

どうも、まだ死ねない身であるらしい。

人生、自分の思い通りにならないとよく言うが、まさか、望んだ死も思い通りにならないとは。

「……はあ」

自然と出た溜め息に、少年は、先ほどまでの自分に別れの意を込めた。

生きるべきか、死すべきか、それが問題だ……これを言ったのはシエークスピアだったか。どうも、自分は生きるべきのようだ。

負けず嫌いの自分が、一度全部に負けた。同じ屈辱は味わえない。それに、この遺書であったものは自分を挑発している……生けるのなら生きてみると。

「……誰の悪戯か知らんが、ただじゃ死なないぞ、俺は。」

こう挑発されるとなると……何が何でも生きてやるうじやねえか」

少年

ヤサカオウマ
八坂央真は、紙を破り捨てた。

*

「しかし、どうしようか。する事がない……そもそも……」

そもそも、此処は何処なんだか。気づけば、何もわからない。八方塞がりとはこのことか。

「幻想の世界……違う世界と考えるのが普通か」

取り敢えず歩いてみれば相変わらずの田舎道。見た感じ、自分の世界とは、大差無い。木 如いては植物に詳しくはないので、唯一見られる生きているものの違いも無く思える。

「どうしたものか。初っぱなからこれじゃあな」

後悔は読んで字の如く、後から悔やむものだ実感させられる。

「ん、ここからは森の道か」

暫く歩くと、森の入り口に突き当たった。他に道はないようだ。取り敢えず、この森を抜けることにした。

*

辺り一面が木。

まあ、珍しい風景だ。元の世界じゃ中々お目にかかることが出来ないんじゃないか、と央真は思う。富士の樹海はこんな感じだろうか……そんなことを考えると、此処に入ったのが失敗だったように思える。いや、失敗だったのだろう。方位磁針も何も無いのにどうして、此処から無事に出て来れるだろうか。

……早速、背の低い木の枝に頭を打ちつけた。身長は一七〇センチ程度でも、こんな目に遭うとは。

「くそ……」

痛む頭を抑え、足下と頭上に気をつけて、央真は森の深部へと進んでいった。

進む途中、獣と思しき鳴き声が何度か聞こえた。ああ、やっぱり生き物がいるんだと思った。

暫く進んで行くと、今度は人の話し声と思える音が聞こえた。

(……話し声……か?)

足音と気配を殺し、その音源にひっそりと近づいて行った。

「……」

一本の大木の影に隠れ、覗くと、三人の人間がいた。

スキンヘッドの三人組。服装も袖を無理やり破った皮っぽい服でほぼ同じ。ズボンはジーンズっぽい。体型は、チビとデブとノッポ。

なんつーステレオタイプの悪党か。世紀末でヒヤッハーしてするような小悪党だな。

そんな考えで、もっと見てみようと思つたのが運の尽き。ベキツ。

足下で、その音が鳴った。見ると、折れた枝が。

「あ」

声を出さなければ、ばれることもなかったろうに。

「ああ!? 誰がいるのかア!?!」

デブが叫ぶ。

言葉が通じた……そんなことはどうだっていい。ああ、またなんつー典型的なミスを……。

第二の人生は、幸先の悪いスタートとなった。
小悪党共が、斧、剣といった凶器の類を持って、中央真の前に立っ
た。

「……特殊な能力とか、ないんですかねえ……はは……」

やっぱり、悪夢であってほしい。これが夢ならばの話だが。

01 始まりは森の中に（後書き）

年末に投稿とか、俺何やってんだろ。

でも、そんなことはどうだっていい。重要なことじゃない。

何だっていい、小説を投稿するチャンスだ！

02 双剣使いの金髪

……ツイてない。

央真は自分を呪う。

目の前には、小悪党三人。しかも凶器持ち。殺気というもの、
央真にビシビシと伝わって、足が竦んだ。

「……ガキか。変な服来てるが、どうも金目のモンは持ってねえよ
うだぞ」

チビが言う。

「こんな森人中、ガキ一人で来るか普通。オイ、ガキ」

チビが手に持った短剣を央真の左の頬に軽く当てる。皮膚が少し
切れて血が流れる。

「な、なんでしよう？」

「何だつてこんなところにいる？」

……それはあんた達もだろう。

ツツコミたくなるのを抑え、央真は質問に対する答えを用意した。

「た、旅人です……」。

金も底を尽き、食料を求め、この森に入りました」

うん。咄嗟に吐いた嘘としては上々だ。

「そうかい」

「いや……だから……その剣を……」

「俺達三人も人に追われていてね」

「えっ？」

チビは訊いてもいないのに、自分達の状況を説明し出した。

「近くの都市で人を殺してね……化け物に追われるようになったの
わ」

「……化け物……？」

「ああ、この森にもいるがね、両方恐ろしいモンよ」

……で、どうしろと。

「お前を囷にさせてもらっ
「は……………い……………?」

*

「何でこんなことに……………」

央真は木に縛られていた。縄でがっしりと、抜けられないように。小悪党共が言うには、央真を化け物と呼ばれる人物が解放する間にやっっちゃうらしい。何て頭の悪い作戦か。殺さなきゃいけないのか。

そもそも、その化け物がこっちに来るとは限らない。下手したらずっとこのままだ。

「……………それは嫌だ……………」

央真は息を吸い、

「おーい！ 誰かー！ 助けてくれー！」

と叫ぶ。それはもう、必死に。きっと小悪党共は、びっくりしているだろう。

(ま、あいつらにとっても好都合じゃないか?)

そう思い、叫び続けると……………

「誰かいるのか!?!」

と、小悪党共に言わせるなら獲物がかかったとはこのことだろう。割と若い男の声が返事してくれた。

「!?! 助けてくれー！ 早く!」

「そこか……………!」

ガサガサと木々と茂みを掻き分けやって来たのは、金色短髪のイケメン甲冑男。

青い瞳がよく似合うその青年は、両の手に剣を携えていた。

身長は央真より10は高い長身で、体格は鎧を装着しているために判断しづらいのだが、首回りを見るに筋肉質であるらしい。

「! 大丈夫かい、君」

ズバズバツ。

一瞬。刃が閃き、央真を縛る縄が切れる。

「……………」

央真は絶句して、ストンと腰が引けて地面に座りこんだ。

きつと小悪党共も絶句しているのだろう。こんなにあつさり人質が解放されるとは…………というより、普通、誰か一人がここに残つて人質を『巧く』使うだろうに。どうにも頭は悪い奴らだ。

「…………そこにいるのは判っているぞ」

キツと目を鋭くして、青年は剣を再度振るつた。

「うわっ!?!」

辺りにひゅんと風の音が鳴り、辺りの木がキレイに切れる。

「ひっ!?!」

木の影に隠れていた小悪党共が足を竦め、硬直していた。

*

「さて、お尋ね者も確保したことだし」

青年の足下に縄で縛られて丸くなっている小悪党三人。どうも、力が入らず、抜け出そうとしても抜け出せないようだ。

「君…………名前は?」

青年は、央真を見て言う。顔は穏やかだ。

「八坂央真…………」

「ヤサカオウマ…………ふむ。こころじゃ聞かない名だね。ヤサカ…………変わった名だ」

「いや…………名前は央真です。八坂は家名」

「…………ああ、そうなのか。それじゃ、この国の出身じゃないわけだ」

「まあ…………国ってどうか…………世界が違うわけですが…………」

「? どういうことかな?」

「あつ…………え…………」

央真は青年に事の成り行きを話した。

「……信じられないような話だが、こんな森に装備無しで一人でいるようだしね」

「はあ……何とか理解していただいたようで……。えっと……」
中央真が青年の名を呼ぼうとするも……。

「ん？ ああ、ごめん。自己紹介がまだだったね。」

私はヴィラン・デュエル。近くの都市で教師兼聖騎士をしている」

「あ、すいません。えっとヴィランさん？ こんな森ってのは？」

ヴィランの言葉を思い出し、気になった点を質問してみる。『こんな森』というくらいならば、何かあるのだろう。

質問を聞き、ヴィランは小気味良く答える。

「ん。ああ。」

この森には化け物が一匹いてね」

「化け物……？ あっ……」

そういえば……。

小悪党共がそんなことを言っていたような……。

ちようど、その時、大地を揺るがすような、生物の咆哮が森中に響き渡る。

「っ！？」

「来たか……」

バキバキ……。木がへし折れる音が少しずつ近づいてくる。

グオオオオ……。

うなり声と共に、『化け物』は現れた。

強靭な四肢に灼熱の炎のような鬚たてかみ。巨大な顎に大きな牙。

それは、中央真の世界のライオンに似ていた。しかし、目の前のそれは、ライオンとは比べものにならないほどにデカい。優に五、六メートルはあるうか。

「……中央真君、離れているんだ」

「え……」

「来る……！」

獅子が再度咆哮を上げた。

「グオオオオオ

!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0063ba/>

幻想のアイデア

2012年1月2日01時46分発行